2023年６月発行
印 刷　東海大学医学部付属病院

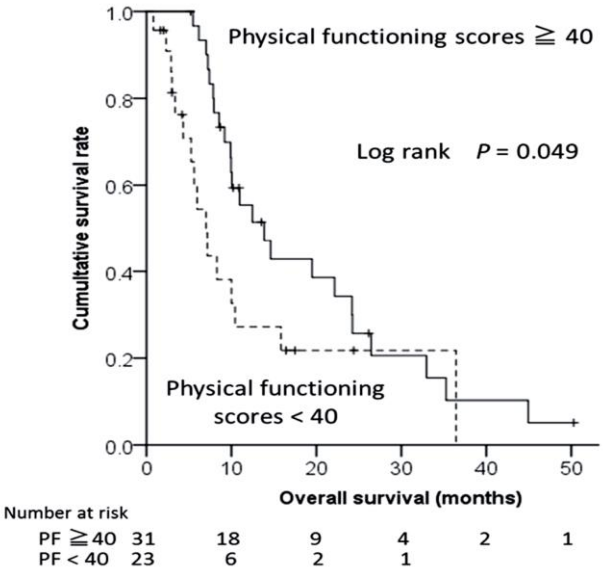
②点滴の分子標的薬（ラムシルマブ：サイラムザ®）

肝がんの腫瘍マーカーAFP（アルファフェトプロテイン）値が 400ng/mℓ以上の方が対象です。高血圧などはありますが、自覚的につらい副作用が比較的軽く、主に高齢の患者さんに適しているといえます。

③内服の分子標的薬（レンバチニブ：レンビマ®、ソラフェニブ：ネクサバール®、レゴラフェニブ：スチバーガ®、カボザンチニブ：カボメティクス®）

＊４種類の内服薬の主な副作用とその対策

：手足症候群：尿素含有クリームでの保湿　ステロイド軟膏での治療
：食欲不振：嘔気に対し制吐薬　食事内容の工夫
：下痢：止痢剤・整腸剤　食事内容の工夫
：甲状腺機能低下症：ホルモン補充療法（内服薬）
：蛋白尿：尿検査と必要時薬物の減量・休薬
：倦怠感・疲れやすさ：軽度では軽い運動　内服治療もあります



左の図は、ソラフェニブ治療を受けている患者さんに関する私たちの研究結果の一部です。治療開始時の身体機能が良好な患者さんほど、長期に生存ができることを示しているものです（庄村ら,BMC Cancer,2015）。
運動を習慣にし、体力を維持していくことは、肝がんの治療に良い影響をもたらすだけでなく、他の生活習慣病の予防にも役立ちます。
ウォーキングやラジオ体操など、身近で取り組みやすい運動をぜひ継続してみてください。

《著者紹介》

現在、肝がんの外来化学療法は、以下の3名の看護師が患者さんとご家族の問診などの看護支援を担当しています。

庄村雅子（中央：東海大学医学部看護学科）
岡部春香（右：医学部看護学科）
佐藤えみ（医学研究科先端医科学専攻）
お困りのことなどあれば、お気軽にご相談ください。

メール：s-masako@tokai-u.jp
電　話：0463－90－2035